特集

生涯にわたって学び続け、その「学び」を社会の中で生かす。「学び」から「行動」へ

地域で展開される住民参加の活動やNPO活動などをとりあげます。

今号の視点 スマートフォンにサポートしてもらい、ろう者が「地力」を発揮しています。きっかけはデジタルのキーパーソンと出会ったこと。「ＮＰＯ法人西部ろうあ仲間サロン会」の挑戦をお伝えします。

YouTube 動画を見ながら工作に挑戦

スマートフォンが私の地力を引き出す

～ NPO法人西部ろうあ仲間サロン会（米子市）

地域の中に拠点をつくる

「ＮＰＯ法人西部ろうあ仲間サロン会」ができるきっかけは10年ほど前。高齢のろう者の居場所づくりからはじまりました。米子市両三柳（りょうみつやなぎ）から旗ヶ崎（はたがさき）に拠点を移転したのは５年前のこと。「地域の中にろう者の拠点をつくることで、地域の人が難聴について知ったり、ろう者と偶然出会ったときに会話をするような機会を増やせたらと考えて」と事務局の和田雅子（わだまさこ）さんは言います。理事長の森田忠正（もりたただまさ）さんたちと相談して、コロナ禍で手狭（てぜま）になった場所から、まちの真ん中への移転を思いきりました。

地力に気づいてほしい

地域の中に溶け込みたいと、米子市が募集する「地域活動支援センター」の運営事業に応募したのは一昨年のこと。事業者に採択されて一年がたちました。地域の人と交流したいと、耳の聴こえる人もいっしょに利用できる地域食堂やカフェ、手話サークルを運営しています。

地域活動支援センターって？

障がい者の自立を支援するセンター

地域活動支援センターとは「障害者総合支援法」に基づき、障がいのある方を対象に創作的活動、生産活動、社会交流の機会を提供する施設です。施設ごとに活動内容はちがいますが、障がいのある方が能力や適性に応じて自立した生活を送れるようにサポートしながら、社会からの孤立を防ぐため、さまざまな活動を行っています。

NPO 法人西部ろうあ仲間サロン会は、米子市に３つある地域活動支援センターのうちのひとつとして活動中です。

ボロボロで床も傾いていた広い邸宅。少しずつ改修を重ねて今の姿になりました。

社会への理解を深めるためには交流が一番。高齢ろう者がいつまでも活動に参加できるよう、「100まで元気」を合言葉に活動しています

理事長：森田忠正さん

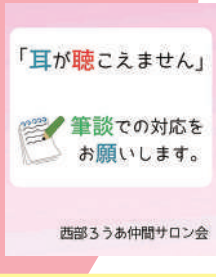
たまたま来た人の、ちょっとした口コミでいらっしゃったり。じーんわり、ずーっとある。このさろん食堂はそんな感じ

事務局：和田雅子さん

毎週金曜日はさろん食堂の日♪

サロン会の公式 LINE

「便利情報」から進むと…



サロン会の公式 LINE は、ボタンを押すと『すみません、110 番してください』や、『トイレはどこですか？』というメッセージが画面に表示されるよう工夫されました。話さなくても、スマートフォンの画面を見てもらうことで簡単に自分の意思を伝えることができるようになりました。「公式 LINE は仲間で情報を共有するのに最適。安心感も生まれる」と坂本さん。今では 80 名を超えて利用が広がっています。

もともと手話通訳者として働いていた和田さん。ろう者が、社会の側から「障がい者だから無理だ、できない」と思わされてきていることが気がかりだったと言います。「ろう者にはいろんな力がありますが、引っ込み思案になりがち。情報も発信できるし、手伝ってもらうだけではなくて、本当は人を手伝うことができる」と、和田さん。地域の人とふれあう中で、ろう者がもともと持っている力、「地力」に気がついてほしいと期待します。

デジタルのキーパーソンと出会う

とはいえ、サロン会は、いわば音のないしゃべり場。手話を知らなければ外国に来たように感じてしまう人もいます。「よい方法を探していたときでした。あるとき隣の町内会の民生委員と話していると『うちの町内会には公式 LINE があるのよ』と聞いて。これだ！と」。和田さんの声がはずみます。さっそく隣の町内会に住む坂本正巳（さかもとまさみ）さんを紹介してもらい猛烈にアプローチ。坂本さんはスマートフォンの LINE アプリを駆使し、旗ヶ崎二区自治会をデジタルで改革した立役者でした。手話もできる坂本さん。サロン会に公式 LINE を導入したいという和田さんからの依頼を二つ返事で快諾しました。

あいサポーターのバッジは付けとりましたけど。役に立ちたいという思いはずっとありました

坂本正巳さん

スマートフォン教室が人気の活動に

「ぼくは防災士の活動もしています。あるとき、ろうの方に『災害のときは死ぬ覚悟をしています』と言われて。それを聞いて“損をしている”と思ったんです。今はスマートフォンひとつあれば誰とでも会話ができるし、しようと思えば人命救助だってできます。対策をすれば何でもできることを知ってほしいと思いました」と坂本さん。まずはサロン会に４台のスマートフォンを置いて、デジタルやネットが身近にある環境を整えることからはじめました。スマートフォン教室を開いて LINE 電話の方法を伝えると、遠巻きに見ていた人も興味津々に。最初４、５名の利用を見込んでいた教室は、多い時には20名が訪れる人気の活動になりました。

最初はスマートフォンに消極的だった人も、今では YouTube で野菜の育て方を調べたいと言うまでになりました。6月11日のスマートフォン教室では、YouTube を見ながらものづくりに挑戦。手書き入力で動画を検索する方法や、動画に字幕をつける方法を教わりました。

耳が遠くなるのと、ろうは同じ

LINE に手書きで入力する方法を伝えると、スマートフォンを持ちたい人が続出しました。「ろうの方って、“あかさたな”の認識が全員にあるわけじゃないんです。だから文字を選んで打つよりも、手書きで入力するほうが漢字も使えて便利なんです」と坂本さんが言うと、「そう。特に漢字には強いんですよ、ろうの方は」と和田さんもうなずきます。「音声入力もアクセントが違うと難しいこともあります。なので、うちの町内会の高齢者にも手書き入力をすすめています。達筆で書かれますよ」と坂本さんはほほ笑みます。「ろうの方は耳が聴こえないだけ。それは歳を取って耳が遠くなるのと同じなんです」。

オニヤンマを模した
虫よけグッズが完成♪

完成した作品を見せ合いっこ。
教材の YouTube 動画は坂本さんが用意しました。

社会はお互いさま

現在、サロン会では地域の防災訓練に参加する企画をすすめています。「障がい者がいると訓練の足手まといだと言う人がいるのも事実です。でも、自分が歳をとったりして足手まといだからって放置されてもいいですか？と問われると黙ってしまう方がほとんど」と坂本さん。「私なんかは世の中が障がい者像をつくっているように見えるんです。サロン会では受け手・支え手をなくすことを最初からしています。本来はお互いさま。お隣どうしの物々交換のように気軽なものです。そんな気づきを地域で共有できたら」と和田さんが言います。

“障がい者像”を変えることができるのは、当事者本人の動き。「あまり声高に言うんじゃなくて、じんわりとした交流の中で、いわゆる障がいがないといわれている人たちに刺激がいけばなあって」と、和田さん。デジタルと出会い、ろう者の世界が少しずつ広がっています。

問合せ先
NPO法人西部ろうあ仲間サロン会
〒683-0845 米子市旗ヶ崎6丁目15-26
TEL：0859-57-8342　FAX：0859-57-4137

公式 LINE